

英語分詞構文の同時性・補足性

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2002年11月1日 受理)

概要

英語の分詞構文において、動詞の現在分詞形はどのような働きをしているのかについて考察するものである。現在分詞は、進行・未完了という共通の意味を持ち、それが主節に対する同時性を生み出し、この同時性により分詞構文と主節とが接続されると考えるものである。ここで進行・未完了という概念が、主節の事象の時などを基準にしたものである、ということが原理として働いていると見るのがここでの新しい見方である。そのように考えることによって初めて、分詞構文がいくつかの意味に分類されるとか、後置分詞構文の中で、なぜ“and (finite verb)”とパラフレーズされるものがあるのか、といった疑問が解消されることが分かる。また、次のような対比においても、理解に苦しむことがなくなる。

a. Knowing no French, I could not express my thanks.

b. *Because I was knowing no French, I could not express my thanks.

分詞構文を使った際の文体的効果も、このような分詞構文の主節に対する従属性という構造上の成り立ちから、容易に理解することができる。

[1] 問題提起

分詞構文と名づけられているものの中で、次のように主節に対して後置されているものに対し、筆者は疑問を抱き続けてきた。これらの例はすべて WEB ページからのもので、下線部が分詞構文である。(この後の例文も、断りのないときは WEB ページからの引用である)

- (1) This initial loss of water reduces the pressure at depth, lowering the boiling point of water already hot enough to boil. More water boils, forming more steam.
- (2) More important, the flexed knees reduce the moment of inertia, making the body rotate faster.
- (3) He faithfully recorded their movements over many years, making them available for future study.
- (4) Some of the greatest damage from an earthquake happens when any of these types faults shakes the soil under buildings in low-lying, water-logged areas, causing what's called liquefaction.
- (5) However, when a chlorine monoxide molecule encounters a free atom of oxygen, the oxygen atom breaks up the chlorine monoxide, stealing the oxygen atom and releasing the chlorine atom back into the stratosphere to destroy more ozone.
- (6) This reaction happens over and over again, allowing a single atom of chlorine to destroy many molecules of ozone.

その疑問とは次のようにまとめられる。

後置分詞構文で、

疑問1) なぜ、“and (finite verb)…” 「そして・・・する」と paraphrase されるものに、現在分詞が使われるのか。

疑問2) 次の「～しながら」に対応する次の場合と、それが対応しない上の例の場合とで、現在分詞の共通点、相違点は何か。

- (7) The free chlorine atoms then can react with ozone molecules, taking one oxygen atom to form chlorine monoxide and leaving an ordinary oxygen molecule.
- (8) This reaction happens over and over again, allowing a single atom of chlorine to destroy many molecules

of ozone.

このように整理しようとしてみると、後置の場合だけでなく、分詞構文としてより頻度が高いと思われる、分詞構文が主節に対し前置される場合にも、現在分詞の役割、機能は何なのかという疑問が同じように沸いてくる。

疑問3) 前置の分詞構文と、後置の分詞構文とで、現在分詞の役割に違いがあるのか。

また、

疑問4) 形容詞や過去分詞で始まる分詞構文では、なぜ現在分詞 *being* が省略されている、と言われるのか。

形容詞や過去分詞から始まる節が主節の名詞を直接、修飾していると見ることはできないのか。それとも *being* の省略ということの納得できる根拠があるのか。

[2] 現在分詞の進行性

他の基本的構文から分詞構文を派生、変形させて得るということに関して、次のような主張を目にした。

次の(9)のような対応から、現在分詞の分詞構文は本来何らかの接続詞、主語、進行の助動詞 *be* を備えており、それらが削除された結果生ずるものである、すなわち *ing* は進行の現在分詞である、とする見方があるとすれば、それはきわめてナイーブな考え方であると言わざるを得ない。

(9) a. *Going out*, he tripped over the mat.

b. ~~*As he was going out*~~, he tripped over the mat.

なぜなら常に(9)のような対応が成立するとは限らず、次の(10)b は文法的であるが(10)a は非文である。know のような動詞は、一般に進行形を作らない。

(10) a. **Because I was knowing* no French, I could not express my thanks.

b. *Knowing* no French, I could not express my thanks. (pp.107-8: 今井) (河本により番号など変更)

この主張は一見正しいものの、だからといって全く“*ing* が進行の現在分詞とは関係ない”と結論を下すことには反対である。この引用は、現在分詞の役割は何かということは別として、表面的な変形ということについて述べている点では問題なく、9)や10)で分かるように、単なる省略ということではうまく処理できないことは確かである。筆者は、そのことを踏まえ、現在分詞の基本的性質や分詞構文の歴史的発達などの面から分詞構文を説明することが極めて意義深いことと考える。ここで、本質的に“*ing* 形が進行の現在分詞そのものである”という、この引用で批判されていることに近い考えをこれ以降で主張するものである。ただ、(10)のような例は、当然、現在分詞の性質からうまく説明できなければならず、筆者の主張の是非をチェックする重要なポイントになる。従って、ここから次の根本的な疑問に至る。

疑問5) 分詞構文の中の動詞の現在分詞形はどのような役割を果たしているのか。

分詞構文の中心は現在分詞であり、まず、現在分詞そのものの役割について調べておかなければならない。Onions は現在分詞の用法を次のように分類しているが、それは目新しいものではない。

1. 叙述形容詞として

The city lies sleeping.

2. 連体詞として

He was a *squeezing, grasping, scraping, clutching*, covetous old sinner.

3. “独立構文”において

I will come, *weather permitting*. (pp.243-4: Onions)

1, 2 では、現在分詞は共通して能動を意味し、かつ「～している」の日本語が対応することが分かるが、この分類は現在分詞の現れる状況を分類しただけのものであり、このことから現在分詞の本質は見てこない。現在分詞そのものの意味として次のこともよく知られている。

「現在分詞は動作・行為の継続・反復を意味するので、継続分詞(durative participle)、反復分詞(iterative participle)、未完了分詞(imperfect participle)などと呼ばれ、過去分詞は完結・状態を意味するので完結分詞(perfective participle)、完了分詞(PERFECT PARTICIPLE)、結果分詞(effective participle)などと呼ばれる：…」(p.833:新英語学辞典) (波線は河本による)

別の言い方をすれば次のようになる。

現在分詞テンス-*ing* は、主動詞の指示時点と同時の時点を示し示す、ということになる。この同時

性は未完了(imperfect)アスペクトの一面である。(p.222: 中右)
 従って、現在分詞の本質といえ、未完了、継続、進行の意味ということでよかろう。ここから分詞構文の特徴、性質を説明することができないだろうか。このことをこれ以後で試みることにする。

[3] 現在分詞の同時性 (分詞構文を含む複文において)

分詞構文では、中心になる動詞が分詞であるため、分詞構文だけではそれが表す時を決定できないのは当然である。そのことについて、まず、一般論として次のように言える。

分詞構文(Participial construction)というのは、分詞を主要素とする語群が文全体を修飾して副詞的に用いられている場合に言う。この構文では、述語動詞の時制と同時のことを表すには現在分詞を用い、それより以前に起こったことを表すには完了分詞を用いる。(p.152: 安井)

これに関連して、次のように補足しなければならないことは気づきにくいことではある。

(A) The people *working* in the factory asked for a pay increase last month.

.....

非定型としての分詞は、それ自体で、ある一定の時を唯一的に指定する機能を有しない。つまり、時指示の機能に関して自立的ではなく、コンテキスト依存的である。ここでコンテキストとは、言語的文脈だけでなく、場面的状況をも含めてのことである。端的な例証は、さきほどの(A)で、そこに見られるあいまい性はこれら二種のコンテキストに依存している。具体的にいえば、主節の時点と発話時点のいずれかが準拠時点となるのである。(p.224: 中右)

したがって、分詞構文は、主節の時点または発話時点のいずれかを基準にし、分詞構文の箇所が主節に対し同時か以前かに基づいて、現在分詞、完了分詞がそれぞれ利用される、とまとめられる。しかしながら、関連付けられた二つの事象に関して、ここで述べられた同時性というのは、“時制としての同時性”ということで、必ずしも二つの事象の実際の同時性を言っているのではない。この後者の同時性を、“時制としての”を外して、単に(広義)同時性と呼ぶことにする。

分詞構文においては、時制としての同時性があれば、常に広義同時性を持つことになる。この点が分詞構文の特徴であるが、これは to-不定詞句の同時性と対比してみると分かり易い。後で述べるように、to-不定詞句では“時制としての同時性”があるときでも、to が前置詞としての方向性の意味を持つことから、実際には未来(指向)性を持つからである。それに対し、分詞構文では“時制としての同時性”が存在するとき、先に見た現在分詞が進行・未完了であることから生じる広義同時性が常に成立する。(9)a では、Going out の部分の事象が he tripped over the mat の事象の生起、成立の際に進行中である(現在分詞の進行性のため)ことから二つの事象が同時に生起、成立することを示している。他方、to-不定詞では、未来性でもって残りの部分と結びついていて、それによって to-不定詞句が目的、結果を表すということになる。従って、現在分詞と不定詞とは全く異なる非定型の形でありながら、進行・未完了、目的という異なった基本的性質から生じる同時性、未来性によって、それぞれ残りの部分に結び付けられている、という類似点、相違点が明らかになる。

[4] 現在分詞の接続性 (分詞構文を含む複文において)

(9)a を一つの例として、進行性が含まれた文を考えてみると、現在分詞の進行・未完了の意味から来る実際の広義同時性に関連して、筆者は次の問いに到達した。

疑問 6) ある事象が、単独で継続、未完了ということがありうるか?

結論として、それはないと言える。進行を表す部分は、常に文脈や状況の中で、ある基準になる時を基に考えられるものであるということが分かる。つまり、継続・反復などを表す形については、その基準になるころの事象や時が常に文脈や状況の中に存在し、それとの同時進行性ということがその基になっている、という結論に達する。この**現在分詞の進行の意味が相対的に決定されるものである**という点が、分詞構文を分詞構文たらしめている本質である、ということは次節で示すことになる。前置詞や接続詞から始まる句や節であれば、それらは文の残りに対し、それらの語の意味で結び付けられている。分詞構文においては、主節に対して接続する機能を果たす語が原則として必要ないが、その接続の機能が現在分詞の進行の意味からの広義同時性によって生み出される、というのが筆者の到達した結論である。

以上の説明から、(9)、(10)の違いを見ても、ある種の動詞が進行形を持たないことと、分詞構文の中では、

knowing のように現在分詞（進行形）が使われることに矛盾があるとは考えられないことが分かる。そのことを別の言い方で言えば、(9)a の現在分詞の用法をプロトタイプとして、その拡張として(10)a が生じている、と考えることもできるのではないだろうか。この拡張を支えているのが、現在分詞の進行・未完了性から来る同時性である。この拡張という考えに関しては、歴史を遡る資料の検討が必要で、今後の課題としたい。

[5] 前置の分詞構文

以上の現在分詞の基本的意味、機能を基に、まず、前置の分詞構文を見てみよう。次は前置の分詞構文の例である。

(11) All things considered, it is not a bad bargain. [条件節]

(12) This done, we went home. [時間説]

(13) It being very cold, we made a fire. [理由節]

これらは主に Onions からのもので、Onions は主節に対する分詞構文の機能について、次のように説明している。(ただし、これは前置された分詞構文の中でも、分詞の主語を伴ったものについての説明である)

独立節(Absolute Clause)とは、述部が定形動詞の代わりに分詞からなり、意味上、時間・理由・条件、または譲歩の副詞節もしくは付帯状況(Attendant Circumstance)の副詞句に相当する節のことである。かかるグループは、“独立”(Absolute)[L. *absolutus*=free]と呼ばれるが、それは、構文上、文の他の部分から独立しているように見えるからである。(p.121: Onions)

このように、分詞構文と主節との関係は複数あることはよく知られていることであるが、それでは、この分詞構文の中で、現在分詞がどのように機能していると考えられるか。非常に残念なことに、この点に関して直接言及しているものを筆者は目にすることがない。そのことを考えるのに、まずは、分詞構文の起源についての Onions による解説を頭に入れておく必要がある。

英語では、他の言語の場合と同様、分詞副詞節(Participial Adverb Clause)は、発生的には単一の副詞的付加詞であって、斜格(oblique case)の名詞(または名詞相当語句)と、それに一致する分詞からなり、付帯状況・原因・条件などを表していた。(p.124: Onions)

つまり、主節との関係が継続、反復、完了などに機能分類される分詞構文において、その中の現在分詞の意味は、元々現在分詞の形容詞的用法(連体詞修飾の用法)であって、[2]で述べたように、進行形に象徴されるような進行・未完了である。そうであれば、先に考察した、現在分詞が持っている進行・未完了という意味を持った進行事象というのは、他に時間の基準になるものが必ず存在し、それに対して相対的に同時であるということである。その基準は主節の事象であったり、その中の時を示す副詞だったりする。分詞構文が主節の表す時に対し、進行中・未完了ということである。つまり、ここには現在分詞の進行・未完了から来る分詞構文の主節に対する広義同時性が働いていて、その広義同時性によって分詞構文と主節とが結び付けられていると理解できる。このことが筆者が考えついた点である。Onions が言うように、元々分詞構文は(広義の)付帯状況を示すもので、付帯状況というのは随伴的なもので、同時性が(程度の差はあれ)その中に含まれている。それによって、分詞構文の主節に対する関わりが生じ、そして、その意味的関わりは、接続関係を意味する接続詞が原則としてないため、文脈上から決定されることになる。それが分詞構文の機能分類ということに現れるということである。

文体的効果について、Onions が次のようにまとめている。

「中世英語における独立分詞の文体的効果は、古代英語の場合とほぼ同様である。それは使用した場合、文にのびのびとした動きを添えたが、その技巧性に災いされていつもそれと感ぜられなかったのがあった。近代英語では、事情が異なってきた。ここでは、スタイルへの重要な添え物になっていて、スタイルに多様性と簡潔さを付与している。それは、文にいきいきとした動きを与え、説話文や記述文を書くすべての作家にとって、従属的観念を表現するための調法な手段となっているのである」(p.126: Onions)

このことへの理解は比較的容易であろう。それは、分詞構文というものが、非定型動詞からできていて、主節に対する依存形式であり、従って、主節へ従属していることで、主節より重要さで劣った形の述べ方になっているのである。また、前置分詞構文は、すでに述べたように、主節との関係から時、条件、理由などに機能分類することができるが、それは用法としての二次的機能であり、一次的には、現在分詞を中心とした分詞構文が、主節に対し同時であり、その結果として、広義付帯状況を副詞的に表すものである、というふ

うに考えることができる。

[6] 後置の分詞構文

前置の分詞構文が以上のように理解できることが分かったところで、同じように後置の分詞構文を考察してみよう。前置と後置で特に本質的な違いがあるとは考えられないので、次の予測が立てられる。

- 1) 後置の分詞構文も主格に対し従属的、補足的
(それは「進行性→同時性→接続性」から来る)
- 2) 前置主節に文脈上の関連性が強い
- 3) 全体が compact な表現になる

1)の同時性という観点から見れば、主節と分詞構文とが内容的に広義同時性で結びついた、関連付けられたもの(塊)と見ることができるのは前置の場合と同じである。このことから、恐らく全体が塊と認識できる何がしかの意味上の条件、範囲が存在していることが予想される。そして、前置された主節の方が文脈に強く関係し、後置された分詞構文はそれに対し補足的になっている。それが後置分詞構文の文体的特徴につながる。従って、この後置の場合2)、3)の特徴を認めることに問題はないだろう。

ここで、次のことを確認しておきたい。本論の最初に挙げた6つの例に見られるように、後置分詞構文が主節と時間的に少しずれている場合や結果を示す場合、日本語訳では「そして～する」と直せば、英文の意味が大体伝わる。この場合、現在分詞の「進行」の意味が筆者には、理解できなかった。即ち、疑問1)、疑問2)で述べたように、現在分詞の持つ進行の意味が、パラフレーズや日本語訳にどう関係しているのか全く理解できなかった。そこのところが、前節までで述べてきたように、現在分詞の進行の意味から来る二つの事象の広義同時性により、主節と分詞構文が結び付けられる、ということで理解できるということである。

分詞構文が表す事象は主節の表す事象と一まとめにして捉えられるようなもの、というのが分詞構文が使われるのに必要な条件であるという理解に達したが、それらの時間的關係について厳密には次の2つに分けることが出来る。

- ① 狭義の同時
- ② 時間差がある

①の“狭義の同時”という場合、日本語でも「～しながら」という言い方で同時性を意味し、かつ副詞的に扱えるので我々日本人にとって違和感がない。これは、まさに狭い意味での同時進行性そのものということができる。その例を次に示しておく。

(14) The free chlorine atoms then can react with ozone molecules, taking one oxygen atom to form chlorine monoxide and leaving an ordinary oxygen molecule.

(15) This reaction happens over and over again, allowing a single atom of chlorine to destroy many molecules of ozone.

これらの形に対し、次の例は日本語にぴったり対応する形がなく、「そして～する」と“and”の形で訳さざるを得ない。言い換えれば、日本語訳としては等位接続により同等の重さで述べる以外になく、日英語で文体的効果に差が生まれてしまう。この場合が筆者の大いに悩まされてきたものだが、分詞構文の中の現在分詞が進行・未完了の意味から生じる同時性でもって分詞構文が主節に結び付けられていて、「～しながら」と「そして～する」の違いは、単に時間的な差異から来ているに過ぎないということである。二つの事象において、無条件に、一方が分詞構文の形で結び付けられているわけではないのである。次に最初の例を再掲する。

(1) This initial loss of water reduces the pressure at depth, lowering the boiling point of water already hot enough to boil. More water boils, forming more steam.

このように、時間差があるときも、分詞構文と主節とが完全に独立したものと見ているのではなく、分詞構文の部分が主節と一体として捉えられ、全体が簡潔に表現されている、ということであろう。従って、一体としての捉え方が可能である条件、範囲には、自ら、ある種の微妙な判断が関係しそうな制約が存在していることが予測されるが、このことについては深入りしないことにする。

このように考えると、後置の分詞構文も、その使用可能条件を除き理解できたことになる。

[7] 現在分詞の省略された形

次の例では、下線部が分詞構文である。

- (16) Bombarded by the sun's ultraviolet energy, CFC molecules break up and release their chlorine atoms.
(過去分詞から始まる分詞構文)
- (17) These elements always have existed in the stratosphere, released from sources such as soil, water vapor, and the oceans.
(過去分詞から始まる分詞構文)
- (18) Closer to Earth in the air we breathe – Troposphere –, ozone is a harmful pollutant that causes damage to lung tissue and plants. (形容詞から始まる分詞構文)

これらの形について、次のように言われる。

過去分詞や形容詞で始まる分詞構文は、being を補って考える

これも筆者が大いに疑問に思っていた事柄であった。なぜ省略とみなさなければならないのか、というのがその疑問である。この種の分詞構文の見方としては、例えば次のように述べられる。

位置は文頭・文尾ばかりでなく、文中にも挿入される。現在時制・完了時制・能動態・受動態が見られる。しかし being は省略されることが多いので、このような場合は過去分詞で始まることになるか、または名詞(句)や形容詞(句)だけになる。…主語が表現されるとき、ほとんど意味のない *with* を伴うことがよくある：Things seem simpler *with you living here*. (ただしこれは *you (who are) living here* とも解される。) (p.832: 新英語学辞典) (波線は河本による)

このように、(16)、(17)、(18)の例では、現在分詞 *being* が省略されていると言われているが、そのことは、これまでの我々の分析からは次のように理解できる。それは、現在分詞の進行の意味から主節との同時性が生まれ、この同時性によって分詞構文と主節とが結び付けられる。従って、分詞構文の主節に対する接続の機能は、もともと現在分詞から生じる機能、働きであり(しかも省略されるのは、助動詞としての *be* や *have* の *ing* 形だけ)、従って現在分詞が省略されていると見るのが適切であるということになる。即ち、“現在分詞が省略されている”というは理にかなった考え方である。接続詞などが使われない形でありながら、従属性を備えた複文を生み出すということでは特異といえるもので、それを可能にしているのは現在分詞の基本的意味である進行性から来ているというのが本論の主張である。

【8】分詞構文の出現条件

A PRACTICAL ENGLISH GRAMMAR では、分詞構文の出現条件が次のようにまとめられている。最後のものを除き、筆者ははじめて目にしたものである。

- ① 同じ主語による二つの動作が同時に起こる場合は、通例その一方を現在分詞によって表わすことが可能である。

He rode away. He whistled as he went.

= He rode away whistling.

He holds the rope with one hand and stretches out the other to the boy in the water.

= Holding the rope with one hand, he stretches the other to the boy in the water.

- ② 同じ主語によるひとつの動作にすぐ他の動作が続く場合は、はじめの動作を現在分詞で表せることが多い。この場合、分詞は前に置かなければならない。

He opened the drawer and took out a revolver.

= Opening the drawer he took out a revolver.

- ③ 第2の動作がはじめの動作の一部をなすか、初めの動作の結果である場合には、第2の動作を現在分詞で表すことが出来る。

She went out, slamming the door.

He fired, wounding one of the bandits.

- ④ 現在分詞はまた「*as /since /because*+主語+動詞」の代用にもなる。つまり、後に続く動作の理由を説明することになる。

これらは、我々がこれまで主張してきたように、分詞構文が主節と広義同時性を持つと考えられる場合に使用可能である、という正にその使用条件を述べていると考えられる。また、それ故に、分詞構文が、従属的(補足的)役割を果たすことにより、全体が簡潔性を生み出している、という分詞構文の文体的効果につながっていることもうなずける。特に、後置分詞構文で“*and (finite verb)*”で置き換えられる場合や結果が示される場合、日本語訳に反映されない場合があっても、分詞構文という従属性から補足的な述べ方になっている

ことが強調できよう。

このようにまとめられると、分詞構文の使用に関して、次のような制約が働いているように感じられる。

制約 1：分詞構文は、主節で表される事象に制限を加えてはならない。

②、③から、2つの事象が連続して起きるとき、一方が分詞構文にできる可能性があるわけだが、その場合、次のことが言えそうである。

制約 2：分詞構文と主節との文中での出現順は、それらの事象の実際の生起順に従う

また、④から次のことも言えそうである。

制約 3：分詞構文が理由を示す場合、それは主節に対し必ず前置される

これらの制約が本当に条件なしに、あるいは条件付きで成立するのか、そうだとすれば、それが何から来ることなのか、これらは筆者にとってこれからの課題である。分詞構文は主節との関係を明示する接続詞などが原則として不要であるため、自由ではあるが、それだけにその使用が条件付けられ、固定化されてくると理解される。それは、because 節などで主節の事象に対する理由を述べる場合、主節に対し前置でも後置でも可能であることと対比されるが、それは because という接続詞がはっきりした接続の意味を持っているからであると考えられる。

[9] 接続性を示す他の形式

ここでは、以上の分詞構文の理解の仕方が、同じように他の形式にも当てはまることを見ることにより、分詞構文に関する我々の主張が特異なものでないことを示すことにする。

筆者はこれまで to-不定詞や付帯状況の with などを考察してきているのであるが、それらが、今日、現在分詞と共通した面を持っていることに気づくことになった。これらの形はすべて二つの事象（事態）が関係し、それらが to-不定詞、with による付帯状況、分詞に応じて、一方の事象が他方の事象に対し、それぞれ目的、近接、進行中ということで関連付けられていると述べることができる。次は結果を表す to-不定詞の用法とされる例である。

(19) The free oxygen atom then may join up with an oxygen molecule to make another ozone molecule, or it may steal an oxygen atom from an ozone molecule to make two ordinary oxygen molecules.

with による付帯状況では、with の近接性から来る広義同時性および狭義同時性が成立していると見ることができる。他方、to-不定詞の場合、to がもともと単なる前置詞であることから来る未来性、目的性を持っており、その目的の意味から広義同時性が成立すると理解できる。別の言い方をすれば、目的の意味がプロトタイプで、結果がその拡張になっているということである。結果の場合も、それが目的の裏返しと見ることができることから納得できよう。即ち、to-不定詞の場合には、目的の意味からの拡張、再解釈として結果を示す場合にも使用されると考えれば納得がいく。以上、to-不定詞や with による付帯状況などは、分詞構文において現在分詞が、進行・未完了という意味から、主節に対する広義同時性を生じさせ、それにより分詞構文の箇所が主節や発話状況に結び付けられる、という我々の考えを支持していると考えられる。

また、次の例のように、when の箇所が「～するとそのとき」に対応する場合も同様に考えることができる。

(20) He was doing the dishes when suddenly in came John. (p.213: 福地)

when が元々、時の指定であって、二つの事象の同時性を意味し、この場合も再解釈を伴った機能の拡張になっていると言えるのではないだろうか。when が時を示すことを基本として、通常とは異なり、その拡張として when 以下に断定が置かれる形になっていると見ることができる。このことも、我々の分詞構文の理解と統一的に見ることができる点で、分詞構文の分析をサポートしていると考えられる。

現在では接続詞的に使われる considering, given, providing, provided なども元々分詞構文の中に現れる動詞形であるから、それを基にして、現在のような接続詞的用法が可能になっていると考えられる。(参 p.126: Onions)この場合、分詞構文の従属性がそのまま残っていることも注目に値する。suppose のような命令形による従属節と機能的には同じになる場合があるが、構成的には全く異なっていることが面白いと言える。

繰り返しになるが、明確な接続の意味を持つ接続詞などと異なり、現在分詞が使われる分詞構文の場合、接続の意味はこれまで述べてきたように、いわば二次的、間接的なものであり、その結果、接続の意味が不安定で、意味の拡張などを受けやすく、複数の意味、用法に分類されるようになっている、と考えられる。

参考文献

- 1) 中右 実：「認知意味論の原理」，大修館書店(1994)
- 2) 今井 邦彦 他：「一步すすんだ英文法」，大修館書店(1989)
- 3) C. T. Onions：「高等英文法－統語論－」（安藤 貞雄訳）文建書房(1969)
- 4) A. J. Thomson & A. V. Martinet：「*A PRACTICAL ENGLISH GRAMMAR*（実例英文法）」（江川 泰一郎），研究社(1973)
- 5) 福地 肇：「談話の構造」，大修館書店(1985)
- 6) 「新英語学事典」，研究社(1982)
- 7) 安井 稔：「英文法総覧」開拓社(1982)

The Simultaneous and Complementary Nature of the English Participial Construction

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received November 1, 2002)

We investigate in this article how the present participle can be understood to function in the participial construction in English. We propose here that a present participle has the meaning of progress or imperfection, which has the meaning of simultaneousness of the events represented by the participial clause and the main clause, and this simultaneousness creates a conjunctive function between the two clauses. Considering this way, we find that we are not bothered any more by those sentences that have the participial clause postposed against the main clause and are paraphrased like "... and (finite verb)" as in

a. More water boils, forming more steam.

or by the difference in acceptability/grammaticality of the next two sentences

b. *Because I was knowing no French, I could not express my thanks.

c. Knowing no French, I could not express my thanks.